

# 「飼い主のいない猫」 との共生をめざす街 ガイドブック

問題解決の ABC

東京都福祉保健局

# は し が き

平成 16 年 3 月、東京都は、「東京都動物愛護推進総合基本計画」（ハルスプラン）を策定しました。この計画は、行政と都民、民間団体等との連携と協力の下に、「人と動物の調和のとれた共生社会の実現」を目指すものです。

東京都では、年間約 1 万匹の動物を保護・収容していますが、残念ながらその多くを致死処分しており、その 9 割を子猫が占めています。このため、計画の目標の一つに動物の致死処分数の半減を掲げるとともに、従来から猫の適正飼養の推進策を進めてきました。

その一つが、飼い主のいない猫に関わる問題を解決し、人と猫との共存を目指す取組です。

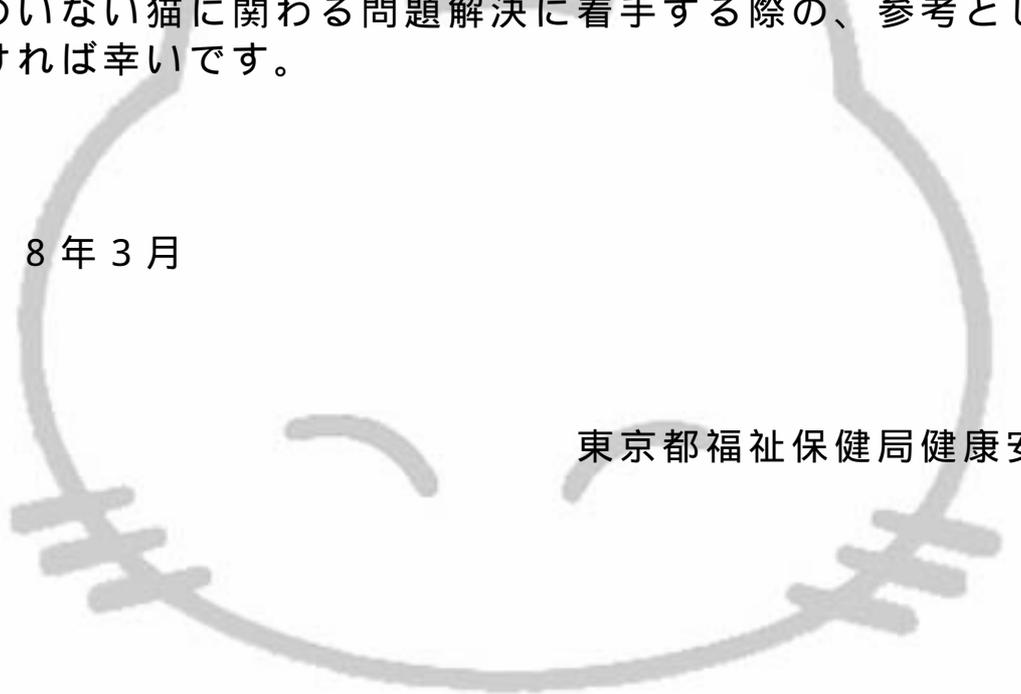
今後は、地域特性や住民の意思を踏まえ、住民が主体となり、民間団体や区市町村、東京都と適切に連携協働していく仕組みづくりが重要です。

そのためのモデル事業として、東京都は「飼い主のいない猫との共生モデルプラン」を実施しました。このガイドブックは、モデル地域で主体的に行われている取組の状況を、住民や自治会、ボランティアの方々の協力を得て蓄積し、取りまとめたものです。

猫に関わる問題に取り組むためには、行政だけでなく地域住民の主体的な関わりが不可欠です。本ガイドブックを、これから飼い主のいない猫に関わる問題解決に着手する際の、参考としていただければ幸いです。

平成 18 年 3 月

東京都福祉保健局健康安全室



# 目次

ガイドブックの考え方	1
猫のこと・・・・・・・・	3
「飼い主のいない猫対策」の流れ	5
「飼い主のいない猫対策」取組の手順	6
モデル地域での取組例	
ケーススタディ 1	14
ケーススタディ 2	16
ケーススタディ 3	17
ケーススタディ 4	19
ケーススタディ 5	21
ケーススタディ 6	23
ケーススタディ 7	24
ケーススタディ 8	26
ケーススタディ 9	28
モデル地域のアンケート調査結果	31
付録 猫問答	39

# ガイドブックの考え方

## 作成の経緯

猫に関する問題は、糞尿やいたずらによる被害、捨て猫、無責任なエサやりなどいろいろありますが、これまで良い解決策はありませんでした。猫による被害を受けている人は、猫が来ないように自衛策を講ずるしかなく、不幸な猫が増えることに心をいためる人は、個人で不妊去勢手術を行い、経済的な負担を強いられるという状況が続いていました。また、毎年1万匹以上の猫を行政が引取り致死処分し、道路などで飼い主不明の死体として処理される猫は2万匹を越えていました。

こうしたなか、平成11年3月、東京都動物保護管理審議会（現在は動物愛護管理審議会）は、猫を終生飼育し「捨てない」こと、不妊去勢手術を行い「増やさない」こと、健康と安全に配慮し不必要に「命を絶たない」ことを基本理念に審議し、猫の適正飼育推進策について答申しました。答申では、人と猫が共に過ごせる社会を実現していくために、今後の東京都の具体的な方針として、「飼い猫への対策」と「飼い主のいない猫への対応」が提言されました。

飼い猫への対策としては、飼い主に「屋内飼育」、「不妊去勢手術の実施」、「身元の表示」の3つを推奨し、行政にその普及を求めています。過密都市東京において、猫を屋外で飼うことは、交通事故、感染症、猫同士のけんかなど、猫自身への危険だけでなく、近隣への迷惑になってしまいます。人と猫が共に暮らすためには、その環境にふさわしい飼い方が求められます。

「飼い主のいない猫」への対応としては、こうした猫を不要なものとして排除するのではなく、地域の問題としてとらえたうえで、地域特性や住民の意思をふまえ、住民主導による合意づくりやルールづくりが可能な場合には、地域の住民を主体に、民間団体や区市町村、東京都が適切な役割を分担し、問題解決に連携協働していく仕組みづくりの必要性を示しました。

## 飼い主のいない猫との共生モデルプラン

ガイドブック作成に先立ち、東京都は、人と猫との共生に向けて住民と民間団体及び行政が協力していく取組のモデルとするため、平成13年度から15年度までの3年間、「飼い主のいない猫との共生モデルプラン」を実施しました。取組の行われている地域を「モデル地域」に指定し、住民の合意形成に向けて区市町村及び東京都が連携して約1年間の支援を行いました。これまでにモデル地域として指定した地域は、20カ所になっています。

それぞれの地域では、自治会との話合いや地域住民への説明会などが開催され、セミナーなどの勉強会や相談会が企画された地域もありました。また、一つの地域の取組が近隣の地域へ波及するなどの広がりも見られました。

このガイドブックには、住民や自治会、ボランティアの方々の協力により、様々な地域で主体的に行われた取組の代表的な実例が盛り込まれています。

## 基本的な考え方

このガイドブックの目的は、「飼い主のいない猫対策」に取り組む地域の合意形成を目指すところにあります。

そのために次のような姿勢に立っています。

- 1 猫を排除するのではなく、命あるものとして取り組むものであること
- 2 飼い主のいない猫の数を減らしていくために取り組むものであること
- 3 猫の問題を地域の問題として住民が主体的に取り組むものであること
- 4 地域の飼い主が猫を適正飼育していくことが前提となること
- 5 地域の実情に応じたルールをつくって取り組むものであること
- 6 猫が好きではない人や猫をはじめ動物を飼養していない人の立場を尊重するものであること

地域での活動が、不妊去勢手術をすることだけを目的にしてしまったり、地域の対立を深めてしまうことのないようにするためには、これらを確認しながら進めていく姿勢が大切であると考えています。

# 猫のこと . . . . .

## 猫を迷惑に思っている人へ

猫が嫌いになったきっかけは人それぞれだと思います。

猫の姿や態度がなんとなく嫌いという人もいるでしょうが、庭に糞をされたり飼っていた小鳥を捕られたりと、迷惑を受けることでだんだん猫が嫌いになっていった人が多いのではないのでしょうか。

迷惑を受けた人は誰でも「猫がいなくなればいい」と考えるでしょう。「捕まえて処分してしまえ」という人もいるかも知れません。

しかし、ハエや蚊ならともかく、問題解決のために猫を処分するというのは、誰にとっても気分のいいものではないでしょう。また、猫の増える原因を解決せずに猫だけを排除しても、時間がたてば元の状態に戻ってしまいます。

猫が問題となる原因を取り除くことで地域の猫の問題を解決していこうと、地域の人や猫のボランティアが取り組んでいる活動があります。活動にはいろいろな手法がありますが、どのような形でも時間はかかります。簡単な方法はありませんし、一部の人だけが負担するものでもありません。

このガイドブックでは、猫の問題に取り組んだ街の実例をご紹介します。これらの地域にも、猫を迷惑に思っていた人は必ずいたはずで、猫が好きな人も嫌いな人も、今まで猫に関心がなかった人も含めて、地域の皆さんが自分達の住む街の問題の一つとして、猫の問題を考えていただきたいのです。



## 不幸な猫に心を痛めている人へ

痩せてお腹を空かせた猫が目の前にいれば、エサを与えたくなるのは少しも変なことではありません。むしろ、その優しい気持ちは大切にしたいものです。

ただ、エサを与え続ければ、猫はその場所に居着き、排泄し、繁殖するようになります。地域に1～2匹程度の猫がいてもあまり問題にならないでしょうが、数が増えるにつれて、糞や尿などにより猫を迷惑なものと感じる人が増えていきます。猫の問題が起きている地域は、多くの場合、このような経過をたどっていると思われる。

「飼い主のいない猫」は自由気ままに生きていて、一見幸せそうに見えますが、暑さ寒さだけでなく交通事故や感染症の危険にさらされるなど、厳しい環境の中で生きており、何より、人に疎まれる存在になってしまうことが不幸であると言えるでしょう。また、これらの猫が産んだ多くの子猫が、行政に引き取られ処分されているという現実もあります。

このガイドブックは、このような不幸な猫を少しでも減らしていこう、という取組を紹介したものです。地域の理解を得ながら活動を進めていくことは、口でいうほど簡単なことではありませんし、時間もかかります。

猫が多い原因や地域を取り巻く環境も様々で、取組の手法に決まった型はありません。その地域の特性や活動する人によって様々なやり方があると思います。

あなたが新たに活動を始めるにあたって、どのような手法が適当かわからない場合は、このガイドブックの中にヒントがきっとあると思います。



# 「飼い主のいない猫対策」の流れ

「飼い主のいない猫」  
対策が必要な地域



取組みの準備

地域の状況把握  
猫の飼育状況 管理が必要な猫の調査  
苦情の発生状況 エサやりの人の特定

計画、目標

目標の設定  
活動の手法の検討  
地域での話し合い  
区市町村との協議  
役割分担

——住民組織が主体的に取り組むことを決定——

活動の開始

猫の飼い主への普及啓発  
不妊去勢手術等の実施  
猫の適正管理  
住民への PR

地域住民への周知

区市町村の支援

地域の合意形成

地域のルール  
継続的な猫の適正管理

## 「飼い主のいない猫対策」代表的な取組の手順

### 【この手順の見方】

この手順は、皆さんが、「飼い主のいない猫」によって生じる問題解決に取り組む際のヒントにさせていただくものです。

地域によって状況が異なりますので、すべてこのとおりにしなければならぬ、というわけではありません。

## 1 取組の準備

### (1) 地域の状況把握

次のような調査により、地域の環境と管理が必要な猫の状況を把握していきます。

#### ア 原因の調査

まず、猫が多い理由を調査します。無責任なエサやり、多頭飼育の家がある、食品廃棄物が多いなど原因は様々です。

原因を見極めた上で適切な対応策を立てる必要があります。

#### イ 地域の調査

地域の猫の数、猫の飼育状況、苦情の発生状況などは、地域へのアンケート調査などを行うことで浮かび上がってきます。

調査を行う場合は、自治会などの了解を得たほうがよいでしょう。また、調査用紙やアンケート用紙には、責任者の氏名や連絡先を明示することが大切です。

#### ウ エサやりの人の特定

エサやりを禁止したりエサやりの人を排除したりすることは、隠れたエサやりや感情的な問題に発展しますから、ルールに従って猫の管理の一端を担ってもらうなどして協調していく必要があります。

このためには、エサやりの人と話し合うことも必要です。初めは猫の情報をもらうなどして、信頼関係をつくりあげていくのがよいでしょう。

### (2) ボランティア等への協力依頼

取組の手法についてはいろいろありますが、実際の経験がないと何か

ら手をつければよいのか判らないことと思います。

多くの事例で経験を積んだ動物愛護団体やボランティアの協力を得て行くと、スムーズに進むようです。

都が委嘱している動物愛護推進員のなかにも「飼い主のいない猫対策」に実績のある人がいますので、区市町村に相談すれば紹介できる場合があります。

## 2 計画、目標の策定

### (1) 目標の設定

地域住民の理解が得られるような目標を設定する必要があります。具体的には、「不妊去勢手術をしたうえで管理して、数年後には猫の数を3分の1に減らす」などです。

多くの場合、猫の数がふえ過ぎて問題が起きているわけですから、活動の結果猫が減っていくということが見えないと、猫が嫌いな人、被害を受けている人の理解は得られません。

### (2) 活動の手法の検討

ひとくちに「飼い主のいない猫対策」といっても様々な方法があります。そこで、地域の状況に応じてどのような手法がよいのかを検討します。猫の数、周辺環境などにより、不妊去勢手術主体でいくか、譲渡を推進していくかなど具体的手法を決定します。

地域の実情に応じた手法を見つけて進めていくことがよいでしょう。



### (3) 地域での話し合い

地域住民の理解や協力が得られない活動は、「猫好きな人が勝手にやっていること」という見方をされて、資金難や苦情などで行き詰まってしまうことが多くなります。

地域の理解を得るための決まった方法はありませんが、住宅地の場合は町会や自治会、集合住宅の場合は管理組合など、その地域の住民を代表するような組織が主体となって説明会などを開き、その場で認め

られれば、その後の活動がスムーズに進みます。

ただ、準備不足の段階でいきなり説明会を開くと、賛成派と反対派で意見が割れて収拾がつかなくなることがありますから注意が必要です。場合によっては、この段階から区市町村の担当者と相談していてもよいでしょう。

#### (4) 区市町村との協議

目標、手法など活動の方向性が決まったら、区市町村の担当部所とも相談し、助言や必要に応じて協力の要請をします。ここでも、「飼い主のいない猫対策」に向けた住民合意形成のための活動であることを明確にすることがポイントです。区市町村が協力できる内容には違いがありますから、それぞれが実施可能な役割を分担していくことになります。

また、区市町村によっては、住民活動に対する支援や、「飼い主のいない猫」の不妊去勢手術などに対するバックアップの制度が設けられているところがあります。活動に際して、こうした制度が利用できるのかどうか十分相談することも大切です。

#### (5) 役割分担（モデル地域の例）

##### ア 住民

活動の主体です。活動組織は、自治会・町会等を基礎とした地域住民で構成され、地域の合意形成に向けた話し合いや広報活動等と「飼い主のいない猫」の管理を行います。

具体例では、「 町（ 住宅） 猫問題を考える会」などとネーミングして有志で活動をスタートし、徐々に地域に認知されていった地域、自治会等の住民組織の中に主体的な実働チームを作った地域、合意形成を促進するために自治会等の住民組織が広報部門を分担する地域もあります。

##### イ 動物愛護団体（ボランティア）

豊富な活動経験や蓄積したノウハウに基づいて、取組手法に関する技術提供など活動への助言や協力を行います。

具体例では、エサのやり方やエサの場所、トイレ（排泄場所）の設置や糞の掃除など管理方法、合意作りのための資料作成、地域内の問題抽出のためのアンケート用紙作り、地域集会での趣旨説明、

猫の個体識別、不妊去勢手術のための捕獲、動物病院の選択など活動の多くの場面で頼りになる存在となっています。

動物愛護団体のメンバーや個人ボランティアの中には、（ボランティア（動物愛護団体）の中には、）自ら積極的に行動して下さる方もいますが、活動の主体はあくまで地域住民です。特定の人や一部の人にまかせっきり、頼りっきりになっては活動がうまく継続しないでしょう。

#### ウ 区市町村

地域の合意形成をめざす活動組織を支援し、地域の関係者との連絡調整を行います。また、飼い猫の適正飼育についての普及啓発を推進します。

具体例では、活動が行われていることを町内に周知することへの協力をはじめ、住民集会の会場の確保や連絡調整などが一般的です。そのほか、広報紙に猫の適正飼育の特集を掲載した例、飼い方パンフレットの作成配布や、「猫に関する困りごとの相談会」「セミナー」を区市が主催することにより、各地域で同趣旨の活動を促進した例もあります。

#### エ 東京都

猫の適正飼育に関する普及啓発資材の提供、専門的資料の作成や提供、専門的な問題に対する技術的支援を行います。

### 3 活動の開始

#### (1) 猫の飼い主への普及啓発

飼い主のいない猫の対策は、まず、飼い主が地域の中で猫を適正飼育していることが前提となります。地域に不妊去勢手術をせずに屋外飼育をしている人がいては、「飼い主のいない猫対策」は十分に機能しません。

猫の飼い主に対し、「屋内飼育」「身元の表示」「不妊去勢手術の実施」の3原則について普及啓発してください。

区市町村と連携して「猫の飼い方教室」などを開催した事例もあります。

## (2) 不妊去勢手術

### ア 猫の個体識別

地域にいる猫の中で、飼い猫と飼い主がいない猫の区別、さらに不妊去勢手術が必要な猫がどの位いるかなどを把握する必要があります。特に、手術しようとしている猫に飼い主がいないことを確認しておかないと、のちにトラブルの原因になる場合があります。

このため、猫の写真を撮ってリストを作るなどして、事前に地域の猫を個体識別しておく必要があります。また、手術済みの猫を識別する方法も決めておきます。

### イ 費用の確保

猫のエサ代や不妊去勢手術の費用をどうするか、というのは取り組む場合の大きな悩みのひとつです。

募金、カンパで集める方法や、バザーを開催する、自治会で負担するなどがありますが、いずれの場合も、「猫の問題は地域に住む人みんなの問題である」という共通理解がなければうまくいきません。

地域で資金集めの活動をした場合は、詳細な記録と会計報告が欠かせません。

### ウ 捕獲、病院への搬送

ケージに入れることができる猫ばかりなら問題ありませんが、普通、猫の捕獲は経験のあるボランティアの力を借りなければ難しいでしょう。猫に負担の少ない方法で捕獲・搬送できればどのような方法でもよいのですが、トラップを使う方法が一般的です。

捕獲を実施する場合は、周辺の住民に日時をPRし、飼い猫は外へ出さないよう協力を依頼してから行います。

捕獲した猫の搬入について、動物病院と時間や方法を調整しておきましょう。

### エ 動物病院の選択

飼い主のいない猫の不妊去勢手術は、猫の捕獲が予定どおりにいかないことや、院内感染の可能性など獣医師の負担も大きいものです。また、活動する



側は、手術の費用をできるだけ低く押さえたいと考えるでしょう。

事前に、このような活動に理解のある獣医師や動物病院を調べて、協力を得るとよいでしょう。

### (3) 猫の管理

手術済みの猫が寿命を全うするには、人による適正な管理が必要です。このため、地域の実情に応じたルールづくりと、これをしっかり守った活動を行うことが、なにより大切です。

#### ア エサ場の管理

エサは容器に入れ、与える場所は迷惑のかからないところを選びます。特にエサやりで苦情が出ている場合は、問題のない場所に移動するなどの対策が必要となります。

猫の数が多地域では猫を何ヵ所かに分散させたほうがよいでしょう。

置きエサ(いつでも食べられるように常時エサを置いておくこと。食べ残しの清掃なども行われていないことが多い)はしない、食べさせた後は掃除するなどのルールを作って管理します。

#### イ トイレの設置

猫の排泄場所は大きな問題ですが、決められた場所にトイレが設置してあり、それがきちんと管理されているという事実があると、住民の理解が得やすくなります。

協力者の家の敷地内が、最も苦情が出ない場所でしょう。空き地や公共の場所に設置する場合は、事前に所有者や管理者の了解を得ておき、欠かさず清掃を行わなければなりません。

定期的に「猫うんちパトロール」(地域内を巡回し糞の清掃を行うこと。猫の糞だけでなく、犬の糞、空き缶や吸い殻の清掃など地域の環境美化の一環として取り組むこともある)などを行って、活動をアピールしていく方法もあります。

## 4 住民への PR

猫の問題を地域全体で解決していくためには、住民に理解を求める PR 活動が最も重要といっても過言ではありません。

### (1) PR の手法

地域の全戸にチラシなどを配布する方法によることが多いようですが、活動中や日常のコミュニケーションも大切です。地域内ではいわゆる「クチコミ」も重要な PR のツールと考えられます。その日の活動結果などをホワイトボードで示すことは、活動に対する理解を得るための有効な方法です。

チラシ配布などは1度だけではあまり効果はありません。活動の過程の節目などで、PR や説明会を続けていくことが必要です。

### (2) PR の内容(次ページ参照)

チラシなどで PR する際の内容は、地域の人への参加の意思の確認、活動の必要性、地域のルール、活動における将来像、募金のお願い、経過報告、会計報告などです。

虚偽や誇張が含まれないように注意することは当然ですが、猫に対する思い入れが強すぎると内容が独善的になりがちです。誰が読んでも納得できる内容になるよう配慮が必要です。

また、忘れてならないのが責任の所在と連絡先を明記することです。

### (3) 協力者の発掘

地域の問題や活動内容などを PR することにより、これまで猫のことを心配していた人などが、協力者として表に出てきてくれることがあります。

一人での活動は負担が大きいため、初期の段階で協力者を見つけておくことも、活動を長続きさせるコツかもしれません。

## 5 地域の合意形成

自治会活動や住民への PR などにより地域の合意を図っていかなければ、手術だけをして終わりという結果になりかねません。これでは、新たな捨て猫や他の地域から流入してきた猫により、1～2年で元の状態に戻ってしまいます。

常に地域で取り組んでいるという意識を維持し、地域のルールに従って、継続的な猫の適正管理をしていくことが重要です。

## 「飼い主のいない猫と共に生きるために」

これまで「飼い主のいない猫」については、ふん尿やいたずらなどの被害があっても、対策がありませんでした。

飼い猫であれば飼い主に苦情を言うこともできますが、相手が「飼い主のいない猫」では不満の持って行き場がなく、結局被害を受けている方は猫を憎むようになってしまい、餌を与えている人との感情的な問題や、猫を傷つける事件などが起きることもなります。

もともと「飼い主のいない猫」は飼い猫が捨てられ、ふえたりしたものです。

なにより猫の飼い主の方が、責任ある飼い方をすることが大切です。そうすれば不幸な猫は、これ以上ふえないはずです。

そのうえで、今いる「飼い主のいない猫」をどうするかを考えていかなければなりません。

その方法として、猫を排除するのではなく、これを地域の問題としてとらえ

猫も命あるものだという考え方で、その地域にお住まいの皆さんの合意のもとに、

地域で猫を適正に管理しながら共生していく、

という活動が広がっています。

具体的には、不妊去勢手術を行ってこれ以上ふえないようにしたうえで、適切に餌を与え、食べ残しやふんの掃除をして管理していくというものです。

屋外の猫の寿命は4年程度といわれていますから、このような管理がうまく続けば、「飼い主のいない猫」の数は減少していくものと考えられます。

この活動を進めていくためには、ここにお住まいの皆さんのご理解をいただくことが、一番大切だと考えています。

猫が好きな方、嫌いな方、どちらでもない方などのいろいろな意見を聞きながら、ルールを作って地域で猫の問題を解決していきたいと思っておりますので、皆さんのご理解とご協力をよろしくお願いします。

連絡先

電話 ( ) × ×

# モデル地域の取組例

## ケーススタディ 1

### 地域の環境

都心部、屋敷町の面影を残した住宅街。昔から住んでいる居住者が比較的多く、町内会活動も活発に行われている。近くには猫の集まる区立の小公園や大きな工場もある。

### きっかけ

10年以上前から猫の糞尿などによる被害が発生していた地域です。被害を受けている人と猫の世話をする人との間でトラブルも生じ、町会長への相談も多数寄せられるなど、猫の問題で町内の雰囲気も険悪になっていました。

### 活動内容

町会ではモデル地域の成果を聞き、「猫対策会議」を開催しました。この会議で、モデル地域のボランティアの助言を得ながら猫の対策に取り組むことを決定しました。町会長が主体的に取り組み、猫の手術資金拠出のため募金やバザーなどを行いました。ボランティアとともに飼い主のいない猫の不妊去勢手術を開始しました。

同時に、活動状況を周知するためのチラシを各戸に配布しました。

### その後

地域にいる猫の適正管理を継続させるため、翌年の町会総会では、会の事業として猫の対策（手術費用、猫トイレ管理等）について予算計上しています。

また、近隣地域に不適切なエサやりをする家やいつも置きエサのある小公園があり、そこで増えた猫が移動してくるという問題が残っていました。このため、同様の取り組みが広がるよう町会長が町会連合会の場で活動状況や成果を報告するなどして隣接町会に働きかけています。

## 解説

モデル地域の猫対策の成果を受けて、活動が他の地域にまで広がりを見せた例です。

外部のボランティアに活動のノウハウの提供を求め、町会が資金を調達し、エサやりの人たちが猫の管理を行うという役割分担で始めた活動です。猫による問題がある地域にノウハウを持ったボランティアがいることは稀なため、問題解決の役割分担として代表的な例ではないでしょうか。

## ポイント

- ・ 町会の主導的取組
- ・ 町会活動に予算計上
- ・ 町会とボランティアとの役割分担
- ・ 近隣町会への働きかけ



## ケーススタディ 2

### 地域の環境

都心部の閑静な町並みの住宅街。居住者同士が顔見知りであり、コミュニケーションがとれている。

### きっかけ

空き地にいる猫に通りがかりの人たちがエサを与えていて、猫が20匹近くに増えてしまったという事例で、地域に住んでいたBさんが見兼ねてボランティア活動を始めたものです。

### 活動内容

猫が多く集まっていると苦情の元になると考え、最初に、猫を地域内に分散させるようにしました。猫好きの協力者3名の自宅敷地内にエサ場と寝場所を確保して、エサやり等の管理を依頼しました。同時に、協力者宅周辺の住民の理解を得るため説明を行いました。

不妊去勢手術の費用は、チラシなどで協力を募った地域内の食料品店などに募金箱を設置して、10数匹分の手術ができる募金を集めました。

町会の協力を得て、町会掲示板すべてに常時チラシを貼っています。

### その後

地域のボランティア・区保健所・「地域猫」活動NPOが共催で飼い主のいない猫対策のセミナーや相談会を地域を拡大して開催しています。

この地域の成果を受けて、近隣の町会にまで活動の広がりが見られます。

### 解説

ボランティアに取り組んだBさんは、町会の役員やPTAなど地域活動に取り組んでいたため、町会や地域の住民とのコミュニケーションが取りやすい環境にあり、活動がスムーズに進んだものと思われます。地域の中には大抵このようなキーパーソンがいるので、最初に理解を求めて協力者になってもらうことが、問題解決への早道となる場合があります。

### ポイント

・地域内でのコミュニケーション

## ケーススタディ 3

### 地域の環境

住宅地と農地が混在し、近くを流れる用水路には、野生動物が現われることもある比較的緑と自然が豊かな街。農地が住宅地へと変わり、新しい居住者が増えてきている。

### きっかけ

この地域では、約3年前から猫の糞尿や子猫の産み落としなどに関する苦情が目立ってきました。飼い主のいない猫にエサだけを与える人、屋外飼育の猫のために大量のエサを自宅の庭に置きっぱなしにする人など、秩序なく猫にかかわりを持つ人が多く、猫の飼育方法や不妊去勢手術の是非をめぐって住民間で意見の対立がありました。増えた猫により「街には常に猫の糞尿のにおいが漂っている」との声や「放置してあるエサを目当てにタヌキが現れて大騒ぎ」などのアクシデントもありました。

エサを与える一部の人是不妊去勢手術などを行っていましたが、他の人によるエサやりで猫が増えるため、個人の負担は限界になっていました。こうした中で、飼い主のいない猫の問題解決に実績のあるボランティアグループから情報を得て、地域ぐるみの活動を行うことになりました。自治会での話し合いの結果、当面自治会内の一班で取組を始めることになりました。

### 活動内容

活動は、エサやりの経験を持つ地元住民のCさんによって始められ、エサを与えるだけでは、猫にとっても地域の環境にとっても好ましい方向にすすまないことを理解した隣人4名が、協力者となって進められました。

地域でアンケート調査を実施した結果、猫による被害の多い地域が明らかになるほか、協力を申し出る人も現れました。こうした協力者は、これまで隠れてエサを与えるなど、何らかの形で飼い主のいない猫にかかわりをもっていた人ではないかと思われます。

猫の排泄物による被害低減のため自宅庭に猫のトイレを設けました。

## その後

地域の中に、かたくなに不妊去勢手術をすることを認めない住人がいましたが、活動（ボランティア）グループの代表やCさんが根気よく説明を重ね、地域の人が深夜まで猫の捕獲に取り組む姿勢を見て、不妊去勢手術費用をカンパしてくれるまでになったということがありました。

## 解説

この事例は、エサやりをしていた人が問題意識を持ち、地域住民が主体となって始まったため、飼い主のいない猫の手術などの実績のあるボランティアグループの助言にしたがって進められました。

同じエサやりでも自宅周辺で行っている人の場合は、猫の数が増えることで危機感を持ち、不妊去勢手術の必要性を理解しやすいのですが、「通いのエサやり」をしている人に理解を得ることはなかなか難しいようです。

また、このケースのように地域内の猫の飼い主には、猫の室内飼育や不妊去勢手術に抵抗を感じる方も少なくないようです。地域の合意を目指すためにもこうした方の理解は大切になります。

この地域でも、問題になっている猫の排泄に対して、排泄場所を作ることによって一定の場所での排泄を促そうとしました。しかし、緑が豊かなところでは、猫が好む場所が他にたくさんあり、猫の排泄場所をコントロールするのはたいへんです。そこで、糞で汚れた場所がないか定期的に巡回し、見つけ次第掃除をしてしまう「うんちパトロール」の実行や、糞を見つけた人が活動グループに通報をしてもらう仕組みなどが、地域の合意や理解の促進に役立ちます。

### ポイント

- ・ 地域内の猫の飼い主の理解
- ・ 猫の排泄場所がコントロールできないときは「うんちパトロール」が有効



## ケーススタディ 4

### 地域の環境

高度成長期に開発された郊外の住宅街。農地が隣接している。古くからの居住者がいる一方、世代交代や農地の宅地化に伴って新しい居住者も増えてきている。

### きっかけ

無責任なエサやりにより猫が増加してエサ場を中心に 30 匹以上集まり、糞尿による悪臭や花壇を荒らされるなどの被害が発生していました。

自治会は猫の問題について解決方法を探っていましたが、その対策は「捕獲処分する」「猫を他へ移転する」などの意見を経て、「エサやりを禁止し猫の散逸を待つ」という消極的な対応で始まりました。

しかし、この方法では根本的解決にならないという考えから自治会員である D さんほか 2 名が発起人となり、自治会への働きかけを進めました。その結果、自治会ではこの問題を地域の環境美化の一環として住民が取り組むべきものとし、猫に不妊去勢手術を施したうえで適正な管理をすることにより、猫との共存を目指すことを決定しました。

手術等の費用については、自治会から支出することになりました。

### 活動内容

D さんは自ら活動グループを組織して、飼い主のいない猫対策に取り組みました。

協力者は自治会役員を含め 9 名程度。自治会掲示板付近で猫の給餌管理を行い、協力者宅の敷地内にトイレを設置しています。愛護団体のアドバイスで活動に理解のある動物病院の協力を得て、猫の不妊去勢手術を実施しました。手術の費用は、バザーや募金で集まった資金と自治会からの支出でまかっています。

手術済の標識を着けた猫に対する地域の反応がなかったため、住民の理解を得るための活動も継続して続けました。また、無責任なエサやりの人を非難したり排除したりするのではなく、話し合いやエサやり方法の改善を進め、共に活動する方向を目指しています。

## その後

エサやりやエサ場の管理などのルールも定着し、猫の増加による被害は減少していきました。自治会の皆さんは活動を理解し協力してきましたが、これまで猫の被害を被っていた一部の住民にとって、猫の存在が歓迎されるようになるにはまだまだ時間がかかりそうです。しかし、地域合意を得た活動は着実に継続し、隣接する地域の関心も高まっています。

## 解説

この地域で活動の発起人であり自治会の役員でもあるDさんが精力的に働きかけ、自治会での理解も進みました。「猫の問題解決は地域の環境美化であり、住民が取り組むべき課題の一つである」と理解されています。そして活動グループを組織し、猫好きだけでなく猫が嫌いな人もメンバーに加わり解決を目指しているのが特徴といえるでしょう。

無責任なエサやりの責任を追及する声もあったようですが、増加を抑制するための不妊去勢手術をしていくには、エサやり人の協力が欠かせなかったため、説得と協力要請をつづけたのです。同じ町内でも飼育方法に無頓着な人とはコミュニケーション不足になりがちですが、話し合いにより共に活動するようになっただけで大きな成果です。

また、これは地域住民による主体的な活動であり、行政による金銭面での支援はありませんが、資源ごみ回収の奨励金など既存の制度を活用した資金作りについての助言や、自治会への取り組み趣旨の説明など、市役所や動物愛護ボランティアのアドバイスが大きな力になっています。

## ポイント

- ・ 飼い主のいない猫を減らすことを目標
- ・ 猫嫌いの住民が活動メンバーに参加
- ・ 市や動物愛護ボランティアの現場でのアドバイス



## ケーススタディ 5

### 地域の環境

郊外の古くからある集合住宅。側には、国が管理する河川があり、自然が残されている。河川沿いの遊歩道は緑豊かで、地域外から訪れる利用者も多いが、それゆえに捨て猫をされてしまうこともある。

### きっかけ

団地付近にいる多くの猫は、転出者が猫を置き去りにしたもののや隣接地から流入してきたものでした。これらの猫に対し、団地住民が個別にエサやりなどを行っていました。団地に近い河川遊歩道周辺に捨てられた猫には不特定多数の人がエサを与えており、飼い主のいない猫が多い地域でした。

当団地内での猫による主なトラブルは、1階の居室への猫の侵入などの被害が主なものですが、住民は団地内の猫がこれ以上増加してしまうことを心配していました。

地域の動物愛護団体は団地の住民からの相談を受けて、不妊去勢手術の実施と地域で猫を管理していくことが、猫の増加による問題を減らすと同時に捨て猫の抑止につながる、と助言してきました。

Fさんは元自治会副会長を務めており、自らも団地内の飼い主のいない猫を世話していることもあって、助言された手法をとりいれて問題を解決するため、団地自治会としての取組方法を探っていました。

### 活動内容

地域住民で組織する活動グループはFさんほか10名。活動を支援するのは、市内を中心に7年間の活動実績を積んでいる動物愛護団体です。

地域には約30匹の猫を確認し、不妊去勢手術と個体識別（目印となるもの耳カットなど）が進められています。猫の給餌や糞の清掃等についての特別なルールは作られていませんが、人になれている猫が多く小学生と猫とのふれあいなどが普通に見られ、地域で猫との共存が図られている様子が感じられます。

また、団地自治会員に対し取組についてのアンケート調査を行いました。反対する意見はなく、活動に対する理解が得られているものと思われ

ます。

Fさんはこの地域での活動が、近接する遊歩道や河川敷周辺での捨て猫や無責任なエサやりに対する抑止力になることを目指しています。

### その後

飼い主のいない猫に関わる地域の取組はテレビなどで紹介され、多くの人が知るところとなっているようです。この地域でも団地自治会を通じてチラシを配ってお知らせをしましたが、自治会活動全般が多少停滞気味なこともあって、会員全体が理解し協力してくれるようにはなかなかありませんでした。

活動グループは猫の取組をきっかけとして、停滞している自治会活動の活性化につなげようと努力しています。

また、この地域の特色である河川エリアの捨て猫対策については、河川の管理者とも協力しながら、より充実させようとしています。

### 解説

地域での取組が多くの人に知られるようになると、地域で世話をしてもらえることを期待して捨て猫が増えることが心配されます。しかし、地域住民に猫の対策についての理解が進み意識が高まれば、地域内の猫の飼い主が捨て猫をすることはなくなるはずで、また、住民の目が厳しくなり、よその地域から猫を捨てに来る人に対する抑止力になることも考えられます。

このような考えに基づいて、河川エリアでの動物遺棄を減少させることも視野に入れた取組の事例です。

### ポイント

- ・ 住民意識の高揚
- ・ 住民の目



捨て猫されにくい街

## ケーススタディ 6

### 地域の環境

都心部、オフィスやマンションビル・飲食店・商店・寺院などがある地域。居住者は少なく、商業施設の利用者などで昼間人口は非常に多い。街づくりには地元の商店主らが中心となる自治会活動が大きく寄与している。

### きっかけ

地域の飼い主のいない猫の数は多くはありませんでしたが、無責任なエサの放置や糞害などは、商店街という性格上、美観や衛生面から問題となっていました。自治会では役員会において、自治会として飼い主のいない猫対策に取り組むことを決定し、最初の取組として、地域内の猫の実態調査を開始しました。

### 活動内容

自治会は約 300 世帯で構成されています。地域内の飼い主のいない猫は 11 匹が確認されています。オフィスや商店が多いため多数の人の出入りがあり、エサを与える人の特定などが難しいというのが地域の特性です。

地域内には猫を飼育している人も多く関心は高まっていますが、接客業が多い地域であり、エサ場所やトイレの場所の選定とこれを管理する協力者の確保を課題として活動が進められました。

ボランティアグループの助言を得ながら自治会主導で活動が始められ、自治会役員らが精力的に会員に協力を求めています。

### 解説

この商店街の隣接住宅街は、最初に飼い主のいない猫対策に取り組んで成果をあげた地域で、この商店街の活動開始に大きな影響を与えています。

商店街という性格上、自治会長をはじめ自治会や商店会役員が活動をリードすることで、街全体の理解と協力が進展したものと考えられます。

また、接客業やオフィスなど人が多く集まる街では、放置されたエサや猫の排泄物による汚れは、街のイメージに何らかの影響があると思われます。このため、共通認識として、猫と共生しながらコントロールし解決していく活動への理解が浸透していったものと考えられます。

ポイント

・街のイメージの向上

## ケーススタディ 7

### 地域の環境

多くの人が憩いの場として利用するほか、遠方からの犬の散歩、通勤・通学路としても利用されている区立の緑道公園を含む住宅街。利用者同士のコミュニケーションは、あまりない。

### きっかけ

公園には川沿いに遊歩道があり、猫が捨てられていることもしばしばありました。捨て猫や屋外飼育猫の迷惑相談が寄せられることがありましたが、町会として積極的対応はしていませんでした。

約3年前にHさんが公園の散歩中に捨て猫を発見し、その世話をするようになったことが活動のきっかけでした。当初は関心を示す住民も少なく、保護した猫の不妊去勢手術を個人的に行うなど、細々とした動きにとどまっていた。

その後、保健所やNPO団体が行うセミナーで、地域で猫を適正に管理し問題解決を図る活動や、東京都の「飼い主のいない猫との共生モデルプラン」を知り、Hさんの居住地域での応用を考えたのです。住民・NPO団体・保健所・町会と話し合いや協議をすすめ、町会として猫の飼い主への普及啓発をすすめることになりました。

### 活動内容

地域内の猫は6匹であり、順次不妊去勢手術が行われました。猫には特別な標識はありませんが、写真付のリストを作って把握しています。

公園に捨てられた子猫や産み落とされた子猫は、動物病院の協力を得ながら積極的に新たな飼い主を探して、地域内の猫の数をコントロールしています。また、町会の活動グループは、地域内でエサだけを与えている住民を説得し、親猫には不妊去勢手術を施し、子猫を引き取って新たな飼い主を探すなどの対応をしています。猫のもらい手は都外にも及んでいますが、猫を引き渡す際には直接面談して、責任を持って飼える人にだけ渡しています。

活動資金は、募金、バザー、ガレージセールなどの収益をあてていますが、個人の負担も多いのが実情です。このため、住民の理解がより一層す

すんで協力が得られることを期待して、普及啓発に力を入れています。

### その後

地域内の公園は、犬の散歩コースとして利用する人も多く、糞の放置や放し飼いなどを巡り、公園管理者や利用者と犬の飼い主とのトラブルもしばしば起こっていました。このため区では、町会、公園サポートボランティア、犬の飼い主グループ、猫の活動グループとの協働による、環境美化や人と動物の調和のとれた共生について、地域の総合的なモデルケース作りを進めています。

かつてはしばしば捨て猫が見られた公園には、各方面のボランティアが協働する活動が始まってからは、新たに捨て猫をされたことはありません。

### 解説

不妊去勢手術を推進することにより自然に猫の数を減らしていくという取組が多いなか、新たな飼い主を探すことに力を注ぐやり方も一つの方法です。地域の実情にあわせていろいろな方法を選択し、組み合わせる活動するという柔軟性が必要な場合もあります。

公園は捨て猫の多い場所の代表です。これを防止するのはなかなか難しいことですが、区市町村や警察も含めた地域ぐるみの取組が不可欠です。



### ポイント

- ・公園隣接地域
- ・環境美化、動物との調和のとれた共生地域モデル
- ・新たな飼い主探し

## 地域の環境

郊外の集合住宅と住宅街。農地だった隣接地に新しく分譲住宅ができはじめている。それぞれのコミュニケーションは図られていない。

## きっかけ

遠方から住民ではない人が通ってきて、団地の敷地内にエサを置いていくということが続いていました。このため猫が40匹近くまで増え、糞尿やエサの食い散らかしに団地の住民は困っていました。そして団地の住民からはもちろん、周辺の住宅からも団地に対する苦情が自治会に寄せられるようになりました。

団地の自治会はエサやりの人に注意したり、エサやり禁止の看板を立てたりしましたが効果はありませんでした。そこで、団地の住人であるJさんは市内の活動グループの協力を得て活動を始めました。

## 活動内容

エサやりを止めさせることは無理と判断したJさんは、エサを与える場所を決め、置きっぱなしにしないようエサやりの人と話し合いを続けました。

さらに、この猫の問題が団地の環境問題であると考え、自治会で協議し、猫の不妊去勢手術費用を自治会の予算から捻出し、団地内の協力者とともに手術を実施していきました。

同時に自治会から団地の住人全員に活動を周知するとともに、団地周辺の住宅にもチラシを配布するなどして理解を得ていく活動を続けました。

この結果、現在は、猫の数は10数匹に減り苦情もなくなりました。

## その後

団地に隣接した空き地に、数軒の建売り住宅ができ、新しい住人が入居した後に問題が発生しました。

住宅に近い側にエサ場があったこともあり、猫が集まることに対して苦情が寄せられるようになりました。Jさんはエサ場を移動し、団地でエサを与えているのではないこと、手術をして減らしていく活動を行っている

ことなどを説明しましたが、一番ひどい時期を共有していないため、理解を得るまでにかなりの時間を要しました。

現在ではさらに猫の数も減り、新しい住人にも一定の理解を得られるようになりましたが、その反対側の空き地にできた新築住宅の住人から新たな苦情が出ているため、「Jさんと自治会長が説明にあたっているところです。

## 解説

飼い主のいない猫への活動は、猫を見捨てておけない人が行うことが圧倒的に多いのですが、これは、いわば「被害者」側が活動を起こした事例です。活動に際しては、困っているもの同士ということで理解を得やすいという利点があります。一方、日頃から猫について関心を持たない人であれば、このような活動による解決策があることさえ知らないのが普通です。

この例では、猫問題の解決に経験豊富な人が近くにいたことで対策が始まりましたが、問題のある地域の近くにこのようなノウハウを持った人がいるとは限りません。

相談先としては、飼い主のいない猫の対策の活動をしている動物愛護推進員、NPO 団体などがあります。



## ポイント

- ・ 集合住宅
- ・ 困っている人同士が活動を開始
- ・ 経験豊富な人からの情報入手

## 地域の環境

集合住宅を含む住宅街で、農地や寺院、学校などが隣接している。今までは、集合住宅と戸建住宅の居住者同士のコミュニケーションが図られていなかった。この街では様々な場面で居住者による地域ぐるみの街づくりが始められている。

## きっかけ

この地域では猫の屋外飼育が多く、また、飼い主のいない猫にエサを与える住民や地域外からエサを与えに来る人もあり、猫の糞尿による悪臭や発情期の鳴き声に困っている人が多くいました。飼い主のいない猫は屋外飼育の猫とともに、団地内と住宅地内のエサが置かれている場所を行き来していると思われました。

隣人関係の悪化を懸念して、無責任にえさを与える人への注意がしにくいため、植えたばかりの草花に糞をされて困っている人は、花壇に割り箸を立てるなど、各自工夫して猫の侵入防止を図っていました。

自治会が実施したアンケートによると、ゴミ、カラス、猫などが地域の困り事としてあげられ、自治会としても効果的な猫の苦情の解決方法を探る必要性を感じていました。猫の問題解決に実績を積んでいた地域に住むKさんは、自治会に対して、飼い主のいない猫を増やさないようにしたうえで地域で管理し、猫と共生しながら解決する方法を示しました。

活動に先立って、団地自治会後援で猫対策活動のためのバザーを開いたところ、非常に多くの協力が得られ、関心の高さが改めて確認されました。団地自治会は、猫の問題解決に取り組むことによりコミュニケーションが増え、猫以外の地域の課題も明らかになることを期待しました。

## 活動内容

活動は、中心となる地域の活動家やグループにより始まり、まず団地内の猫の不妊去勢手術から着手し、猫に新しい飼い主をさがす活動も行いました。

団地内では独居の高齢者が少なくなく、なかには飼い主のいない猫をかわいそうに思う気持ちから、エサやりだけをする人もいました。こうした

人に対しては、責任追及するのではなく、理解を求めていくことが活動の柱となっています。高齢者が多いため、アクティブな活動には参加できない人達は、活動資金作りのバザーの品物提供などに積極的に協力しました。

続いて周辺の住宅地でも活動を開始し、自治会は、回覧や掲示板により地域への周知を始めています。飼い主のいない猫が多くいることや、先に取り組んだ隣接する団地での成果を知る住民が多く、活動を理解しない人や強く反対する人はありませんでした。

猫の活動に先行して、この地域では「わんわんパトロール会」を発足させ、犬の飼い主が散歩をする際に地域を見回り、コミュニケーションを活発にする活動が行われています。この活動は、自治会と連携した防犯活動として位置付けられ、捨て猫をされないために目を光らせていることのアピールにもなっています。

この地域では、住んでいる街をよくしようという住民の意識が印象的です。

## その後

団地では、不妊去勢手術済みの標識が付けられた猫が、高齢者のアイドルになっています。室内にこもりがちだった方も、猫たちの世話のため外へ出ていく機会が増え、団地住人との交流も盛んになりました。

## 解説

「飼い主のいない猫との共生モデルプラン」は、猫の問題解決のため飼い主のいない猫を減らしていく活動に、地域ぐるみで取り組むことへの合意形成をめざすものです。

しかし、この地域のように、高齢者の心の支えとして猫を地域で管理していくことを合意点とすることも、一つの形といえるでしょう。

近年、集合住宅の居住者の高齢化が言われていますが、この紹介地域のほかにも、活動地域内で適切に管理されている飼い主のいない猫が、高齢者の心の支えになっている例があります。

モデル地域に隣接する家庭で、動物愛護相談センターに猫の引取りについて相談していたことが分かった事例がありました。Kさんのところに情

報が入って対応できたため、センターで引き取ることはありませんでしたが、このような活動が行われている地域では、なんらかの事情で猫を飼えなくなったり捨て猫があつたりした場合、飼い主を捜すなどして解決することが多いようです。

このため、区市町村や動物愛護相談センターと地域が、普段から連絡を密にして、地域の情報を共有しておく必要があります。

## ポイント

- ・ 高齢者が多い集合住宅
- ・ 地域のコミュニケーションの活性化
- ・ 地域活動が高齢者の心の支え



## モデル地域へのアンケート結果

### 1 アンケートの目的

飼い主のいない猫の問題に関わる取組について意識調査を行い、効果測定を行うとともに、東京都動物愛護推進総合基本計画（通称「ハルスプラン」）に基づく「飼い主のいない猫対策」展開のための基礎資料とすることを目的とした。

### 2 調査期間

平成 16 年 10 月から同年 12 月まで

### 3 調査対象及び方法

#### (1) 対象地域

モデル地域として取組を開始してから 1 年間以上経過している 7 区市 10 地域に対してアンケートを依頼した。

#### (2) 対象者

モデル地域内の 20 歳以上の住民を無作為に抽出し、調査票を配布し、後日回収した。調査票の配布、回収は、地域内のボランティアの協力により行った。

#### (3) アンケートの内容

36、37 ページのとおり

### 4 アンケート結果

#### (1) 回収状況

10 地域のうち 4 地域から期間内に回答が寄せられた。

4 地域合計の調査票配布数は 287 通で、うち 198 通の回答（回収率、71.2%）があった。（グラフ 1 アンケート回収率）

#### (2) 活動の認知度

アンケート回答者 198 名のうち、活動を知っていた人は 178 名(90.0%)であった。

（グラフ 2 活動の認知度）

#### (3) 活動に対する評価

設問 2 で、「活動を知っていた」と回答した 178 名に、活動に対する印象を聞いたところ、「良い対策だ」105 名(59.0%)、「方法がなく仕方ない」63 名(35.4%)、「逆効果だ」2 名(1.1%)、「他に良い方法がある」4 名(2.2%)、「無回答」4 名(2.2%)であった。「他に良い方法がある。」との回答には、「猫を駆除することが最良の方法」とする意見もあっ

た。(グラフ3 活動の評価)

#### (4) 活動への関与

同じく、「活動を知っていた」と回答した178名に、活動への関与を聞いたところ、「積極的に関与」26名(14.6%)、「ある程度関与」92名(51.7%)、「関与しない」58名(32.6%)、「活動に反対」2名(1.1%)であった。(グラフ4 関与の程度)

#### (5) 関与した理由、関与しなかった理由、反対した理由

同じく、「活動を知っていた」と回答した178名のうち、設問3で「活動に積極的に関与した」或いは「ある程度関与した」と回答した合計118名(66.3%)の人にその理由を聞いたところ(複数回答)、「地域の課題だから」88名(74.6%)、「猫の被害をなくすため」71名(60.2%)、「良い対策だから」38名(32.2%)、「猫が好きだから」37名(31.4%)、「地域の交流活性化のため」14名(11.9%)、「猫が嫌いだから」7名(5.9%)、「その他」14名(11.9%)であった。「その他」には、「虐待防止のため」「自治会の役員だから」「人間の責任だから」「何となく」などの回答があった。(表1 関与した理由)

また、設問3で「活動に関与しなかった」と回答した58名(32.5%)の人にその理由を聞いたところ(複数回答)、「猫の被害が無いから」17名(29.3%)、「猫が嫌いだから」10名(17.2%)、「猫が好きだから」9名(15.5%)、「勝手な活動だから」(13.8%)、「トラブルになるから」7名(12.1%)、「近所づきあいが無いから」5名(8.6%)、「地域に関心がない」1名(1.7%)、「その他」8名(13.3%)であった。「その他」の理由は、すべて「時間的制約があって関与できない」というものであった。(表2 関与しなかった理由)

さらに、設問3で「活動に反対した」と回答した2名(1.1%)にその理由を聞いたところ(複数回答)、「直ちに猫の被害がなくなるから」、「猫が好きだから(かわいそう)」、「猫が嫌いだから」「勝手な活動だから」というものであった。

#### (6) 活動の前と後の地域の変化

設問2で活動を知っていた人178名に対して、活動前と後の地域の変化について聞いたところ(複数回答)、「猫による迷惑が減少した」109名(61.2%)、「環境美化につながった」47名(26.4%)、「猫に関心を持つようになった」35名(19.7%)、「地域の交流が活性化した」34名(19.1%)、「生活マナーが向上した」18名(10.1%)、「犬の飼育マナーが向上した」12名(6.7%)、「人間関係がギクシャクした」13名(7.3%)、「猫の問題が増えた」10名(5.6%)、「その他」19名(10.7%)であった。「その他」の回答としては「変化はない・わからない」などであった。(表3 活動の前と後の地域の変化)

#### (7) 飼い主のいない猫への印象

設問2で活動を知っていた人178名に対して、活動前と後の飼い主のいない猫に対する印象について聞いたところ(複数回答)、「管理して共生していくと良い」125名

(70.2%)、「共生社会の実現」51名(28.7%)、「猫により和む」32名(18.0%)「猫が好きになった」19名(10.7%)、「猫はいなくなっって欲しい」16名(9.0%)、「猫は好きになれない」12名(6.0%)、「その他」7名(3.9%)であった。「その他」の回答としては「何も感じない・変化はない」などであった。(表4 1 猫に対する印象の変化 )

#### (8) 猫の問題の変化

アンケート回答者全員に、地域内の猫の問題の変化について聞いたところ、「減少した」126名(63.6%)、「変わらない」51名(25.8%)、「増加した」4名(2.0%)、「もともと問題はない」4名(2.0%)であった。(グラフ5 地域の猫問題の変化)

#### (9) 猫の問題解決に必要な対策

アンケート回答者全員に、地域内の猫の問題解決に何が重要か聞いたところ(複数回答)、「飼い主の責任ある飼育」188名(94.9%)、「区市町村の支援」114名(57.6%)、「都の支援」96名(48.5%)、「不適正飼育の取締り」87名(43.9%)、「住民が地域に関心をもつ」86名(43.4%)、「住民のコミュニケーション」59名(29.8%)、「動物愛護推進員の助言」56名(28.3%)、「その他」15名(7.6%)であった。「その他」の回答としては、「不妊去勢手術」「猫の登録制度」「企業の協力」「獣医師の協力」「適正飼育の普及啓発」「猫の駆除」などであった。(表5 1 猫の問題解決に必要な対策 )

## 5 考察

(1) モデル地域の住民の飼い主のいない猫の問題に関わる認知度は高かった。モデル地域では、地域住民に対する活動報告が頻繁に行われており、そのことも認知度合を高める要因のひとつと考えられる。

(2) 活動については、約95%の人が評価し、疑問視や反対する声は低かった。

(3) 「活動を認識している」と答えた人の約66%が活動に関与し、その動機として約75%の人が「自分の地域の課題」とし、約60%の人が「猫の被害を減らす」としており、約31%の人が回答した「猫が好きだから」を上回っている。これは「地域づくりのために活動する」という意識の現われと考えられる。(表1 - 関与した理由)

(4) また、「活動に関与しなかった」と答えた人の約29%の人は、猫の被害がないことを理由としており、自らが飼い主のいない猫による被害等を実感していない場合は、活動に関与しにくいことがわかる。また、約17%が「猫が嫌いだから」、約13%が「猫好きの勝手な活動だから」をあげており、活動は猫好きによるものだからと認識している人が少なからずいることが推測される。今後、活動の目的と効果を正しく伝えることで、合意形成はより促進すると考えられる。(表2 - 関与しなかった理由)

(5) 活動の前と後の地域の変化の比較について約60%の人が「猫の被害減少」をあげ、効

果を実感すると同時に、この活動が「地域の環境美化」、「コミュニケーションの活性化」など「地域づくり」につながったことを実感していることがわかる。(表3 - 活動の前と後の地域の変化)

- (6) 活動の前と後の飼い主のいない猫への印象の変化については、70%以上にあたる人が「管理して共生するとよい」としているが、このうち約3%の人が「猫は好きになれない」又は「猫がいなくなって欲しい」とも回答している。(表4 - 2 猫に対する印象の変化)

地域には、活動の目的を理解し、その成果を評価している人が多いが、これまで猫に庭を荒らされた、糞や尿をされ迷惑したなどの経験がある人にとっては、猫に対するマイナスイメージは好転しないこともあると考えられる。これは、「猫はいなくなって欲しい」とした人のうち、「管理して共生するとよい」「共生社会ができそう」「猫により心が和む」「猫がすきになった」を同時に選択している人は極めて少ないことから推測される。(表4 - 3 猫に対する印象の変化)

- (7) 飼い主のいない猫の問題の変化について、「減少」とした人が約70%になる。長く飼い主のいない猫対策にかかわるボランティアは、地域で取り組む際に「地域のルールを作って、エサやりの時間、猫の排泄場所を設けるなどすると、猫が現れる時間や場所が限定されるため、すぐに効果を実感できる」と、しばしば説明するが、アンケートの結果から地域の人はそのとおり感じていることがわかった。(グラフ5 - 地域の猫問題の変化)

- (8) 飼い主のいない猫の問題解決については、「責任ある飼育」をあげる人が最も多く、飼い主のいない猫が、無責任な飼い主によって生み出され、これをなくすことが重要であることを多くの人認識していることがアンケートから読み取れる。(表5 - 1 猫問題に必要な対策)

また、「責任ある飼育が重要である」とした人の45.2%の人が、「不適正な飼養を取り締る」を同時に選択しており、無責任な飼い主をなくすためには、取締りが重要で、このことが飼い主のいない猫による問題の減少につながるものと考えている人が半数近くいることがわかった。(表5 - 2 猫問題に必要な対策)

問題解決に際してのサポートについては、東京都のバックアップよりも身近な区市町村のバックアップが重要とする意見が約10%上回っており、「地域の課題」解決に地域行政への期待が高いことをうかがうことができる。一方、約3割の人が「動物愛護推進員」を選択しており、選択の理由は明らかでないが、今後、地域での活動にあたっての相談役として、動物愛護推進員への期待は一層高まるものと考えられる。

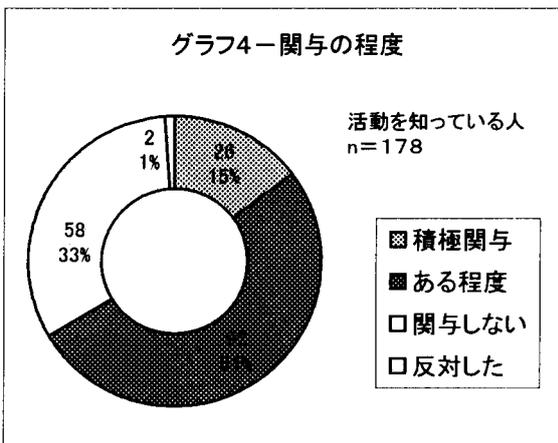
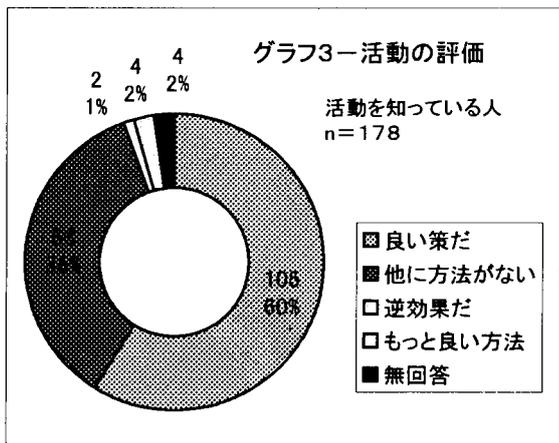
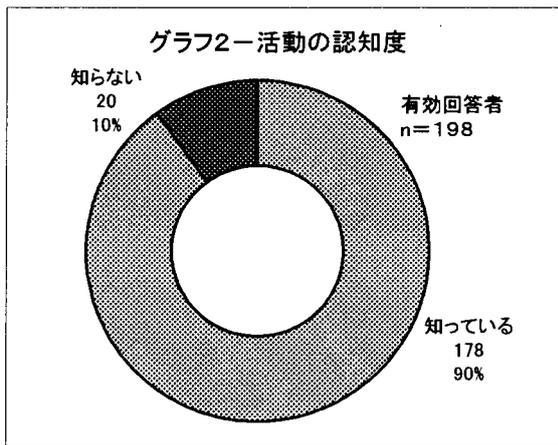
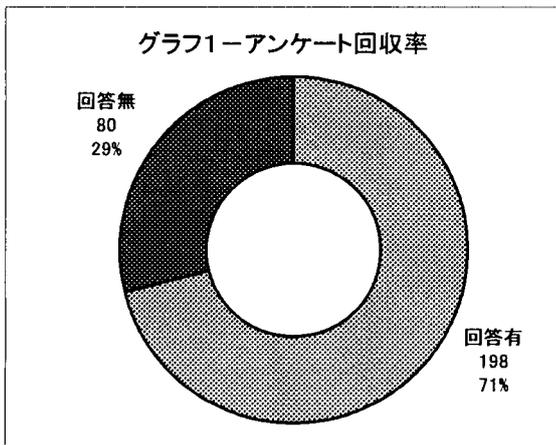


表1-関与した理由

理由	回答数	割合
自分の地域だから	88	74.6%
被害減少のため	71	60.2%
良い対策だから	38	32.2%
猫が好きだから	37	31.4%
地域交流の活性化	14	11.9%
猫が嫌いだから	7	5.9%
その他	14	11.9%

活動に関与した人 n=118(複数回答)

表2-関与しなかった理由

理由	回答数	割合
猫の被害がない	17	29.3%
猫が好きだから	10	17.2%
猫が嫌いだから	9	15.5%
勝手な活動だから	8	13.7%
トラブルになるから	7	12.0%
地域の交流が無い	5	8.6%
関心が無い	1	1.7%
その他	8	13.7%

活動を知っていたが関与しなかった人 n=58(複数回答)

表3-活動の前と後の地域の変化

地域の変化	回答数	割合
猫被害減少	109	61.2%
環境美化につながった	47	26.4%
地域への関心向上	35	19.6%
コミュニケーションの活性化	34	19.1%
生活マナー向上	18	10.1%
人間関係悪化	13	7.3%
犬飼育マナー向上	12	6.7%
猫問題増加	10	5.6%
その他	19	10.6%

活動を知っていた人 n=178(複数回答)

表4-1 猫に対する印象の変化①

意識の変化	回答数	割合
管理し共生すると良い	125	70.2%
共生社会ができそう	51	28.6%
猫により心が和む	32	17.9%
猫が好きになった	19	10.6%
猫はいなくなって欲しい	16	8.9%
猫は好きになれない	12	6.7%
その他	7	3.9%

活動を知っていた人 n=178(複数回答)

表4-2 猫に対する印象の変化②

意識の変化	回答数	割合
共生社会ができそう	43	34.4%
猫により心が和む	25	20.0%
猫が好きになった	15	12.0%
猫はいなくなって欲しい	2	1.6%
猫は好きになれない	2	1.6%
その他	2	1.6%

問9で「管理し共生するとよい」と回答した人 n=125

表4-3 猫に対する印象の変化③

意識の変化	回答数	割合
管理し共生するとよい	2	12.5%
猫により心が和む	0	0.0%
猫が好きになった	0	0.0%
共生社会ができそう	0	0.0%
猫は好きになれない	4	25.0%
その他	2	12.5%

問9で「猫はいなくなって欲しい」と回答した人 n=16

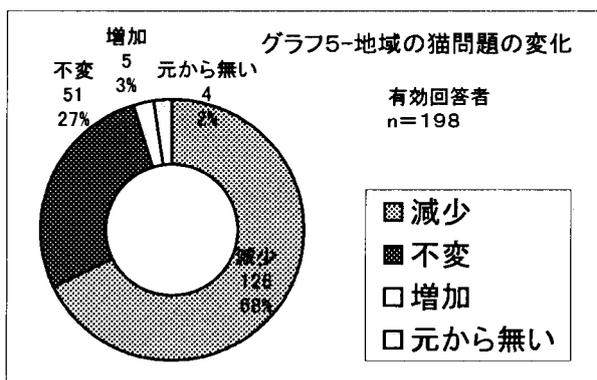


表5-1 猫問題に必要な対策①

必要な施策	回答数	割合
責任ある飼育	188	94.9%
区市のバックアップ	114	57.5%
都のバックアップ	96	48.4%
取締り	87	43.9%
地域住民のかかわり	86	43.4%
住民のコミュニケーション	59	29.7%
動物愛護推進員の助言	56	28.2%
その他	15	7.5%

アンケート有効回答者 n=198(複数回答)

表5-2 猫問題に必要な対策②

必要な施策	回答数	割合
区市のバックアップ	112	59.5%
都のバックアップ	94	50.0%
取締り	85	45.2%
地域住民のかかわり	84	44.6%
住民のコミュニケーション	58	30.8%
動物愛護推進員の助言	55	29.2%
その他	14	7.4%

問10で「責任ある飼育」と回答した n=188(複数回答)

「飼い主のいない猫との共生モデルプラン」アンケート

記入方法 : 設問の該当箇所に 印を付けるか、( ) 内に御記入ください

問1 お住まいの地域で行われている「飼い主のいない猫」の問題解決の活動をご存知でしたか。(一つだけ選択)

- 1 知っていた 問2以降すべてにお答えください。
- 2 知らなかった 問9以降にお答えください。

問2 「問1で、知っていた」とお答えの方におたずねします。  
この活動をどのように思いましたか。(一つだけ選択)

- 1 よい解決策だと思った。
- 2 他に方法がないのでやむを得ないと思った。
- 3 逆効果だと思った。
- 4 もっとよい方法がある。(具体的に\_\_\_\_\_)

問3 「問1で、知っていた」とお答えの方におたずねします。  
活動にはどのように関わりましたか。(一つだけ選択)

- 1 積極的に関与した。 } 問4へ
- 2 ある程度は関与した。 }
- 3 特に関与しなかった。 問5へ
- 4 反対した。 問6へ

問4 「問3で、1積極的に又は2ある程度関与した」とお答えの方におたずねします。  
活動に関与したのはどのような理由からですか。(いくつでも選択)

- 1 飼い主のいない猫による被害をなくしたいから。
- 2 猫が好きだから。
- 3 猫が嫌いだから。
- 4 自分が住む地域の問題だと思うから。
- 5 地域のコミュニケーションが盛んになるから。
- 6 よい解決策だと思ったから。
- 7 その他(具体的に\_\_\_\_\_)

問5 「問3で、3特に関与しなかった」とお答えの方におたずねします。  
活動に関与しなかったのはどのような理由からですか。(いくつでも選択)

- 1 猫による迷惑や被害が特にないから。
- 2 猫が好きだから。
- 3 猫が嫌いだから。
- 4 猫好きの人たちによる勝手な活動だと思うから。
- 5 地域のことに関心がないから。
- 6 近所との交流があまりないから。
- 7 トラブルになるかもしれないから。
- 8 その他(具体的に\_\_\_\_\_)

問6 「問3で、4反対した」とお答えの方におたずねします。

活動に反対なのはどのような理由からですか。(いくつでも選択)

- 1 この方法では直ちに猫の被害がなくなるとは思えないから。
- 2 猫が好きだから(不妊去勢手術など可愛そうだから)。
- 3 猫が嫌い(苦手)だから(猫と共生する必要はないから)。
- 4 猫好きの人たちによる勝手な活動だと思うから。
- 5 住民の負担が大きいから。
- 6 その他(具体的に\_\_\_\_\_)

**問7** 活動前と比較して地域全体に何か変化がありましたか。(いくつでも選択)

- 1 猫による迷惑や被害が減少した。
- 2 地域のコミュニケーションが盛んになった。
- 3 地域の環境美化につながった。
- 4 ゴミの分別・集積所利用など地域のマナーが向上した。
- 5 猫だけでなく犬の飼育のマナーも向上した。
- 6 みんなが地域のことに興味を持つようになった。
- 7 猫の問題が増えた。
- 8 人間関係がギクシャクした。
- 9 その他(具体的に\_\_\_\_\_)

**問8** 活動前と比較して地域内の「飼い主のいない猫」への印象に変化はありましたか。

(いくつでも選択)

- 1 きちんと管理してうまく共生していくとよいと思うようになった。
- 2 猫が好きになった。
- 3 猫によって心が和むようになった。
- 4 人と動物の調和のとれた共生社会が実現できそうだ。
- 5 どんなことがあっても猫は好きになれない。
- 6 早く猫はいなくなって欲しい。
- 7 その他(具体的に\_\_\_\_\_)

**問9** 最近、地域の「飼い主のいない猫」の問題についてどう感じますか。

(一つだけ選択)

- 1 減少した    2 変わらない    3 増えた    4 もともと問題はなかった

**問10** 「飼い主のいない猫」の問題を解決するには何が重要だと思いますか。

(いくつでも選択)

- 1 動物の飼い主が責任をもって正しく飼うこと。
- 2 地域住民が地域のことに興味をもつこと。
- 3 地域の住民がコミュニケーションをよくすること。
- 4 都のバックアップがあること。
- 5 区(市)役所のバックアップがあること。
- 6 動物愛護推進員のアドバイスがあること。
- 7 不適切な飼養をとりしめること。
- 8 その他(具体的に\_\_\_\_\_)

ご協力ありがとうございました。

## 付録 猫 問 答

(飼い主のいない猫対策のよくある質問)

### 1 猫を捕まえて処分すれば手っ取り早いのでは？

猫は「動物の愛護及び管理に関する法律」で「愛護動物」とされているというだけでなく、人が飼うようになってから約 5000 年の歴史があり、人との関係を持ちながら暮らしてきた動物です。このため、猫がたくさんいることで問題が起きたときに、ネズミのように捕獲して処分することで解決を図るという方法は、好ましいとはいえないでしょう。猫が増えすぎる原因をなくさずに、ただ猫の数を減らすだけでは効果は一時的なもので、間もなく新たな捨て猫や移り住んできた猫で元にもどってしまうでしょう。

動物を殺すことは、誰にとっても気分のいいものではないはずです。じゃまなものは排除していくという方向ではなく、命あるものであることを考えに入れて、対応していきたいものです。

### 2 エサやりを禁止すればよいのでは？

猫の問題は、無責任なエサやりが発端になっていることが多いのは事実です。しかし、単純にエサやりを禁止しても、感情的な対立となり隠れてエサをやるようになるだけで、問題は解決しないことが多いようです。また、エサを与えないようにすると、猫はエサを求めて、ゴミを荒らしたり屋内に侵入したりして、被害が周囲に拡散することも考えられます。

「飼い主のいない猫対策」が行われているところの多くは、不適正なエサやりをしていた人と話し合いを重ね、不妊去勢手術の終わった猫が寿命を全うするまで、ルールに従ってエサや糞などの管理をする、という役割を担ってもらっている方法をとっています。

### 3 反対者を説得できないときは？

人を説得するというのは難しいものです。相手の無理解を嘆く前に、まず自分のやり方を考えてみましょう。知らず知らずのうちに「正しい活動なの

だから協力するのが当然」というような交渉態度になってはいないでしょうか。また、「かわいそうな猫を助けたい」という気持ちが前面に出過ぎてはいないでしょうか。

猫の活動に限ったことではありませんが、何かを交渉するにあたっては、まず、お互いの立場を尊重して信頼関係を築くことが必要です。また、このような猫のボランティア活動をしている人や、それを理解している人はとても少数だということを前提に活動を考えていかなければなりません。

#### 4 「地域猫」って、地域で猫を飼うことじゃないの？

いわゆる「地域猫活動」というのは、もともと、「不幸な猫を減らすために、不妊去勢手術をして子猫をつくらないようにし、その猫を地域のみんなが合意の上で、寿命を全うするまで管理していく」という活動でした。これがいつの間にか「地域で猫を飼うこと」という意味になったり、不妊去勢手術さえしてあれば「地域猫」であると主張してみたり、言葉がひとり歩きしているようです。

地域で猫を飼い続けていくということでは猫による被害を受けている人は我慢できないのではないのでしょうか。飼い主のいない猫対策を進めていくためには、「猫を減らすことで周囲への被害をなくし、周辺環境を良くしていく」という、猫を迷惑に思っている人にも猫が好きな人にも共通の利益を示さなければ、地域の理解を得ることは難しいでしょう。

#### 5 不妊去勢手術費用を個人で負担するには限界があるのでは？

これまで、多くの方が個人の努力で猫の不妊去勢手術を行ってきました。しかし、その経済的負担は大きく、よほどのお金持ちでない限り長続きしません。また、その人が転居や病気などの理由で活動に関われなくなると1~2年後には元の状態に戻ってしまうかも知れません。

このため、飼い主のいない猫対策への取組は、個人で行うのではなく地域に住んでいる人たちが自らの街の問題であるという共通の認識の下に、皆で取り組んでいくことが必要になります。地域の中で理解が深まれば、不妊去勢手術費用等の資金も募金やバザーなどで集めやすくなりますし、自治会等の予算から助成するなどの方法がとれる場合もあるでしょう。

登録番号(17)440号

**「飼い主のいない猫」との共生をめざす街ガイドブック  
問題解決のA B C**

平成18年3月発行

編集・発行 東京都福祉保健局健康安全室環境衛生課  
郵便番号 163-8001  
東京都新宿区西新宿二丁目8番1号  
電話番号03(5320)4412 ダイヤル  
ホームページ「獣医衛生の扉」  
[http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/eisei/d\\_vet/index.html](http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/eisei/d_vet/index.html)

印 刷 正和商事株式会社  
東京都中野区沼袋二丁目20番8号105  
電話番号 03(3388)1841